

論文

妻籠宿通過旅行者の心象とCOVID-19による マインド変化についてパイオニアの願いは継承されているか —メッセージノートのキーワード(テキスト)から—

佐藤 博康

Impressions of Travelers Passing Through Tsumago-shuku and Their Changes in
Mindset Due to COVID-19:
Have the Pioneers' Wishes Been Realized?
(An Analysis of the Keywords in the Messages Written By These Travelers)

SATO Hiroyasu

要 旨

旧中山道沿いの宿場町妻籠宿と馬籠宿の間に位置する一石桁立場茶屋には2010年から旅行者によるメッセージを記入するノート(『楽書きノート』)が設置されている。日本人ばかりではなく世界各国からの旅人が率直なコメントによって街道と宿場の印象を残していく。また、この街道と宿場の保全と再生にとって国の歴史的遺産の保存に大きく貢献した小林俊彦の存在は忘れてはならない。小林が願った宿場の保存と再生がどこまで維持できているのか、旅行者のメッセージから探る。とりわけCOVID-19によるニューノーマルと言われる時代においてどのような影響が出ているか、また街道を歩くということがどのような意味を持つのかについても考察する。

キーワード

妻籠宿 楽書きノート 小林俊彦 COVID-19 街道歩き(Walking)

目 次

- I. ねらいと概要
 - II. 妻籠宿およびCOVID-19とウォーキング効果などに関する既往研究
 - III. 調査方法
 - IV. 用語の定義
 - V. 旅行者のイメージから捉えた妻籠の姿
 - VI. 考察：妻籠宿のイメージブランディングについて
 - VII. 分析と結論
 - VIII. まとめ
- 謝辞
注
文献
参考文献

I. ねらいと概要

妻籠宿を世に知らしめた功労者は何と言っても小林俊彦(公益財団法人「妻籠を愛する会」(以下公財「妻籠を愛する会」)前理事長)^{注1}である。このことは町誌や公文書などには残されていないが、妻籠宿をよく知るものにとって異論を挟む者はいない。また、地域の遺産を保存し活用することで地域づくりに貢献したこと、さらにはその行動を通じて国を動かし地域を動かしたことへの評価はことさらいうまでもないことである。

その小林は、かつて、人々が妻籠宿に求めることは、①島崎藤村の生誕地と「夜明け前」や「新生」などのゆかりの人々^{注2}と文学、②木曾街道(旧中山道)に残された歴史的な名残の風景、そして③こうした歴史風土に培われてきた旅人に親切に対応する素朴な人情であると述べている^{1,2)}。そして、妻籠宿が地域保全に取り組み、これを残そうとしていることは、姿、形の風景と人間の心が合わさって醸し出す雰囲気である、と断言する。

さらに、妻籠宿の歴史的景観や宿場の維持について、住民の理解とそれを支えるための利用価値の提供について、保存の意味を説く「理」と、その利活用による経済的効果を意味する「利」の論理を掲げ、そのバランスをとることの重要性を指摘した³⁾。

こうした小林の願いや認識が、重要伝統的建造物群第一号に指定されておよそ50年を経ようという現在も妻籠の宿場に息づいているのだろうか。いうま

でもなく人々の生活や環境は半世紀の間に大きく変化した。人々の行動パターンの変化や情報技術の進歩、さらには地域の人口が大幅に減少する中で、遺産を存続するための住民意識の変化など影響は大きかったのではないかと推察される。ことさら2019年末から始まったコロナ感染症の蔓延^{注3}で、人々の行動が大幅に制限される中、国内外の旅行者行動に著しい影響が生じたことはいうまでもない。

このような環境の中で、妻籠宿あるいは旧中山道の存在をどのようにとらえるべきなのか、また小林の語るところの景観からは見えない住民の意識(理)や景観を支えている経済的背景(利)などの潜在的価値がどのように生き残っていけるのか、今後の妻籠宿を考える上で、大変興味深い。

本稿は、妻籠宿を中心とする歴史的、文化的遺産を中心にした地域のまちづくりを考える一連の検証と旅行者が残す言葉の中から、妻籠宿を通過する旅人が持つ妻籠宿および旧中山道に対する心象とは何か、またそれがコロナ感染症の前と後で通過する旅行者にどのような変化をもたらしたのかを事例研究の一例として取り上げることが目的である。

いうまでもなくコロナ感染症前後で旅行者の動きはいわゆるインバウンド旅行者を中心に大幅に変化している(表1)。この数値的な分析についてはここでは触れないこととする。本稿では小林が求めた上記の3つの指標を基準に、この旅行者の心的表現を通して妻籠宿と旧中山道地域の価値および変化を旅行者の心象から考えることとする。

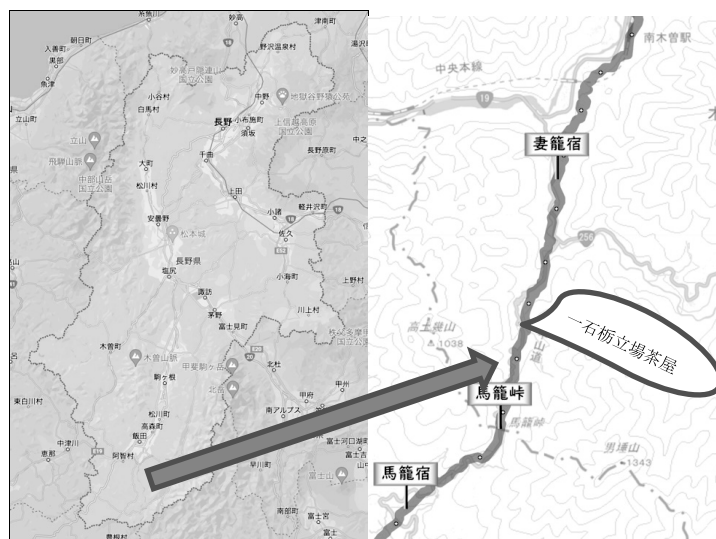


図1. 長野県南木曾町 妻籠宿一石栃立場茶屋

表1 妻籠宿駐車乗用車

2022年10月末日現在(公財「妻籠を愛する会」提供) 単位:台

月	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
4	6,378	7,507	825	4,094	4,808	コロナ解除
5	7,659	9,561	530	4,305	7,184	コロナ制限無
6	4,258	3,865	2,476	2,061	3,310	
7	4,186	4,437	2,637	3,433	3,831	
8	9,195	8,534	5,855	3,475	6,969	
9	7,329	6,830	6,652	3,898	5,018	台風14,15号
10	10,447	6,777	8,301	6,724	8,249	
11	9,164	8,413	9,108	6,960		
12	2,571	2,530	2,137	1,766		
1	1,824	2,292	599	992		
2	1,802	2,067	1,173	781		
3	3,623	3,235	2,572	2,779		
計	68,436	66,048	42,865	41,268	19,133	

表2 馬籠峠を通過した旅行者数(2018-2022途中まで)

単位:人

	2018		2019		2020		2021		2022	
	総数	外国人	総数	外国人	総数	外国人	総数	外国人	総数	外国人
4月	9,255	4,413	9,117	5,668	541	76	3,162	144	3,023	81
5月	7,198	3,501	8,826	4,442	0*	0*	1,020	114	2,993	92
6月	3,392	1,958	3,702	2,506	770	133	645	53	823	57
7月	3,686	3,051	4,639	3,051	404	104	707	67	781	82
8月	4,014	3,060	5,013	4,007	901	146	448	56	828	139
9月	3,952	2,889	4,888	3,723	1,241	119	802	88	1,062	190
10月	6,760	4,784	8,044	6,144	3,298	228	2,519	147	4,146	1,112
11月	5,800	3,564	8,111	4,923	2,808	196	876	95		
12月	1,251	765	1,413	827	486	46	390	13		
1月	621	413	782	548	85	7	116	8		
2月	835	597	771	485	372	17	139	16		
3月	3,083	2,431	1,601	819	626	66	680	58		
	49,847	31,426	45,373	37,823	11,332*	1,138*	13,595	859		
		63.0%		83.4%		10.0%		6.3%		

* COVID-19制限のため集計なし

公財「妻籠を愛する会」のデータより

この論考の後に街道ウォーキングそのものが人々の旅行活動にどのように影響をもたらし、評価されるようになるのか、あるいはこうした行動が地域にどのような効果をもたらすのか、その結果地域づくりの手がかりとしてどのように評価すべきなのかについてより詳細に妻籠宿地域のあり方について研究することが課題となるが、これらについて本稿中では若干触れることにとどめたい。

研究手法は、馬籠峠と妻籠宿との間に位置する一石栃立場茶屋を訪れる内外の歩行者が残した手書きメッセージからさまざまな表現を拾い上げて、可能な範囲でコロナ感染症の蔓延前後で比較することである。旅行者は基本的に母国語で様々に表現しているが、英語と日本語によるものが大部分を占めるため、まず英語と日本語によるメッセージを対象とした。英語表記は基本的に外国人によるものであり、日本語表記は判別の可能な限り日本人によるものと考えた。公財「妻籠を愛する会」にはコロナ感染症前の平成22(2010)年からのノート(図3・4)が残されており、2019年12月までがコロナ感染症以前、そ

して2020年から後がいわゆるパンデミック中のものとなる。

また、2017年からその勢いが顕著となったインバウンド旅行拡大の影響から外国人旅行者が急速に増加したこともメッセージ数の増加につながり、その一方、パンデミックが始まってからは外国人旅行者が最盛期の6%近くに減少していることはメッセージ数の大幅な減少になっているところからも読み取ることができる。したがって、コロナ感染症パンデミック中のコメントから何が読み取れるのかについても検討することとしたい。

Ⅱ. 妻籠宿およびコロナ感染症とウォーキング効果などに関する既往研究

妻籠宿をテーマにした研究および著作は、小林のヒューマンヒストリー¹⁾を中心に小林本人による報告論文¹⁻³⁾、そして宿場景観が初の重要伝統的建造物群(いわゆる重伝建地区)に指定(1975年)されてから

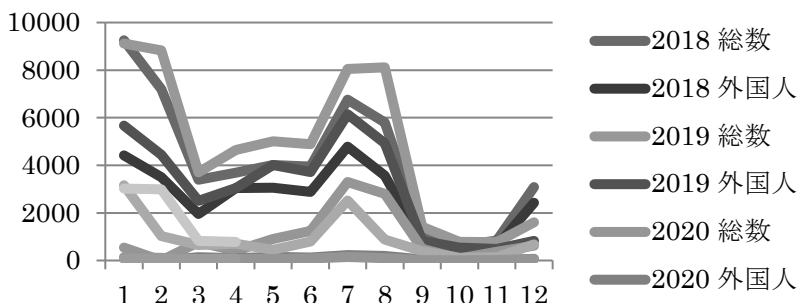


図2. 別月別旅行者数



図3. 『楽書き』ノート

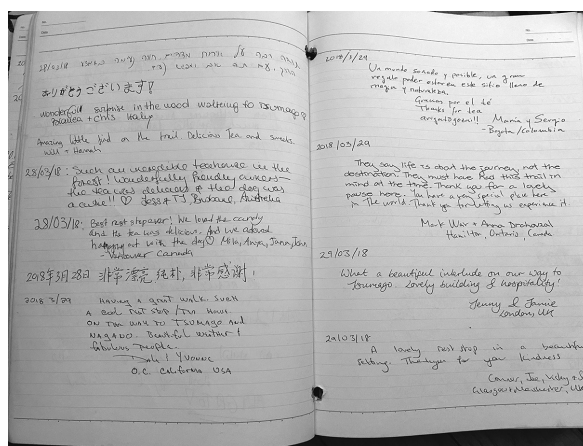


図4. 内容の一例

以降のものがほとんどだと言ってよい。

とりわけ、妻籠宿の価値の創造と保存の効果について、小林はその著作の中で再三にわたって経緯と展望を述べた上で、持続性についての危惧に触れてきている。多くの研究者は小林のこうした著作によって初めて妻籠宿の存在を知りまた刺激を受けて様々な解釈を試みてきた。

その内容は、①建築構造に関するもの⁴⁶⁾、②地域保存に関する住民合意形成に注目したもの⁷⁻¹⁰⁾、③旧中山道の歴史的利活用および保存に関するもの¹¹⁻¹²⁾、④通過旅行者の動機並びに経済的効果に関するもの¹³⁾、⑤島崎藤村を中心とする木曾谷の人物に関するストーリーの数々^{註3)}、そして特に⑥インバウンドと呼ばれる外国人旅行者の動向に関するもの¹⁴⁾などである。加えて、妻籠宿の位置する長野県木曾地域においては、観光資源としての妻籠宿周辺の各種のデータを中心に県や地域の公的機関により発行されている。

また、かつて小林の活動に賛同して、妻籠宿を歴史的景観並びに歴史的地区として保存する意義を学術的にサポートした建築家太田博太郎や小寺武久らは、資源や地場産業の乏しい地域における文化財保存に必要な手がかりとして、観光によるほかはないと指摘し、当時の長野県や国の文化保全および観光開発の方向性を提起した^{6, 7)}。こうした考えはその後の宿場の観光利用を後押しして、コロナ感染症蔓延が始まるまでの観光を適正に利用する姿勢は公財「妻籠を愛する会」によりしっかりと維持運営されて独自のデータや資料を公表して様々な研究に寄与してきているところである。なお、その後2020年にはこうした地域文化資源を利用した活動をサポートするよういわゆる文化観光推進法^{註4)}が制定され文化観光拠点として各地で指定が進められたが、南木曾町(妻籠宿を含む地域)は含まれていない。

これらの研究の中で市川は特に旅行者に注目し、馬籠宿と妻籠宿の間のおよそ8kmの旧中山道を歩くインバウンド・ツーリストを対象に来訪動機からツーリストを分類している¹⁴⁾。歩くツーリズムへの意識を分析することから4つの動機に分類し、それぞれ、「歴史・文化型」「自然中心型」「都会逃避型」「外発的動機型」と名付けた。そしてツーリストの構成として、知識階級やいわゆるクリエイティブクラスを中心とした欧米系ツーリストの市場性を強調した。

市川の研究は、もちろんコロナ感染症の発生前であり、「歩く」ことの意義においていわゆるソーシャルディスタンスや免疫効果などウォーカビリティとして意識される前のことであり、人と人の接触が忌避されるようになる以前のことである。従って、自然の中を歩くことの意義に大きな影響をもたらしたコロナ感染症についての考察が行われていないことは当然のことと言わなければならない。いわゆるパンデミックが「歩く」行動にどのような影響をもたらすのか、いくつかの研究がなされているところであるが、今後さらに実証的研究がなされていくものと思われる。

本稿では、パンデミック前後の旅行者のコメントからどのような影響が出ていたのかを考察すること、並びに、本来馬籠妻籠ルートおよび妻籠宿保全の意義を提唱した小林の目論見が達成されてきたのかどうかを検証することに止めたい。

コロナ感染症が拡散して以来、Yatesなどはその重症化要素として高血圧や糖尿病などの基礎疾患のリスクが指摘されているが¹⁵⁾、特に、肥満との関係において日常的なウォーキングの意味についての研究が海外において数多く発表されている¹⁵⁻²⁰⁾。免疫力を高める、またはコロナ感染症に罹るリスクを避けるためのウォーキングの役割が特に肥満を解消するために有効であるのかあるいは効果はないのか議論されているところであるが、歩くことによる効果は、ソーシャルディスタンスや個人的な活動のゆえに評価される傾向にある。特にHunterの検証¹⁶⁾では、アメリカ大都市におけるウォーキングの変化をコロナ感染症の前後について日常的なものとリクリエーション的なものに分類してその変化を検証して後者のウォーキングが増加したことを明らかにしている。また、イギリスやオランダなどではパンデミックの機会に歩くことや自転車を利用することを通して生活習慣の変化や持続可能な社会づくりを考えようとする動きも現れているのは^{註5)}こうした考え方を裏付ける。

今後これらの研究で深められていくことから旧中山道を歩く意義はさらに高まるものと予想でき、様々な角度からの研究が進むものと思われる。

また、本稿のような妻籠宿に特化したものではないが、言語の分析を通じた観光地イメージの形成にかかるガイドブックやSNSを含めた口コミの効果

については大久保などの研究²¹⁾があり、テキストマイニングを使った量的研究の参考になる。ただし、大久保の研究の基礎になっているのは、インバウンド旅行者に特化したものであること、また、ITを活用したWeb上でのデータが基本になっており、本稿のような多言語による筆記表現とリアルタイムの表現によるものとの違いがあるように思われるため、その違いをどのように評価するかについては今後の課題としたい。

Ⅲ. 調査方法

本稿は、既述したように、平成22(2010)年から令和4(2022)年に至る13年間の旅行者コメントの中から、特に、コロナ感染症の影響を全く受けずインバウンド旅行者が急増した平成28(2016)年度およびコロナ感染症の影響が現れている令和2年(2020)年以降本稿執筆直前の2022年9月までの約3年間を対象とした。いずれも残されたコメントは筆記によるものであるため(図2)、すでに触れたように、件数も多くかつ解読可能であった日本語と英語のコメントを抽出して、利用されている単語を整理して手作業でのワードマイニング式にまとめ、比較することとした。両言語以外の、中国語、ハンゲル、ドイツ語、フランス語、スペイン語など記載されている言語は多様であり、これらを全て解読することは今後の課題とした。

いわゆる『楽書き』ノートは、「妻籠を愛する会」が運営する一石柘立場茶屋²²⁾に設置されているもので、茶屋は妻籠宿と馬籠宿の間の旧中山道沿いの山中に江戸時代から旅人を癒やす目的で設けられているといわれている。山道を登るあるいは降る途中で、冬の寒さや夏の厳しさを避けるいつかの憩いの場を与えてくれる存在になっている。旅人はここで、茶屋の主による様々なもてなしを受けて一息ついたのちにそれぞれの目的地に向かって歩き出すことになる。この時に旅人ははてらいのない率直な旅の感想や思いをノートに吐露していく。そこから読み取ることのできる真摯な思いは、アンケートやいわゆるオンサイトの調査ではないことからバイアスのない純粋な内容であるように思われ、この街道空間の価値を率直に示す内容になっているように思われる。

そのため、表記されている用語(単語や表現)はそ

のまま集計することとした。また、国籍や性別等についてはノートへの記載条件ではないため考慮せず、メッセージのみを対象とした。また、用語の使用法の分類については、モノ、コト、ヒト、自然、感情(喜怒哀楽など)、感覚(いわゆる五感に関するもの)、道に関するもの、時間、その他の9つの分野に分類した。内容は以下の表7の通りである。また、接待を受けての感想が多いため、当然のことながらほとんどの場合で感謝やお礼の表現が予想されたため、これらを表現する用語は計上することを避けた。

Ⅳ. 用語の定義

本研究における用語の分類については、小林の願いに対して旅人がどのように反応し、旧中山道で感じているかを検証するという目的を考慮して、後述の定義を適用することとした。また、心的表現および情緒的表現についての定義については、ディステーションイメージに関する Echtner などによる既往研究²³⁾以降では機能的特性(Functional Characteristics)、心情的特性(Psychological Characteristics)、個別項目特性(Attributes)および全体的な雰囲気(Holistic)といった4つのカテゴリーから評価するマトリックスが一般的に受け入れられていることから、参考にした。

特にモノ(用語上の「もの」とは異なる)とコトについては使用される場面によって様々に表現されている²⁶⁾。本稿では哲学的な検討も考慮して、理解が容易である木村²⁴⁾の解釈を参考にした。その他の分類はコメントを理解する上で筆者の判断で分類を行った。

以上の考察により本稿で利用する用語については下記のように解釈して利用する。

- ・モノ：空間的な場所を占めている物理的存在を示すもの
- ・コト：時間の流れを含んだ存在および今を構成する動きを意味するもの
- ・人：モノとして認識されるもののうちで人類に属するもの
- ・自然：モノあるいはコトの中から明らかに自然現象に属していると考えられるもの
- ・感情：コトの中で喜怒哀楽による心情と結びつけて心に変化の起きる状態を示すもの

- ・感覚：コトの中でいわゆる五感を刺激して生まれる反応を意味するもの
- ・道：コトあるいはモノの中で歩くことに特化していると考えられるもの
- ・その他：いずれにも当てはまらないと思われるもの

V. 旅行者のイメージから捉えた妻籠の姿

妻籠宿を訪れる旅人は、図2で示されるように、季節性が明確である。1年を通じて平均しているわけではなく、雪や日照りの時もあるが四季の移り変わりが感じられる春と秋に集中している。国内外の旅行者にかかわらずこの傾向が強い。従って、この街道に求める旅行者のイメージは歩くだけの目的ではなく街道筋の季節を体感することが大きな目的になっていると考えてよい。

これらの旅人の残したメッセージから読み取れることは以下の通りである。2022年9月以降のインバ

表3

日本語概要	2018	%	2020-	%
a モノ	175	21%	143	19%
b コト	88	11%	63	9%
c ヒト	34	4%	9	1%
d 自然	54	7%	39	5%
e1 感情	161	20%	203	27%
e2 感覚	173	21%	137	18%
f 道	94	12%	100	14%
g 時	18	2%	17	2%
h 他	15	2%	38	5%
合計	812	100%	749	100%

表4

英語概要	2018	%	2020-	%
a モノ	756	29%	365	31%
b コト	579	23%	208	18%
c ヒト	56	2%	21	2%
d 自然	46	2%	18	2%
e1 感情	166	6%	77	6%
e2 感覚	683	27%	350	30%
f 道	195	8%	82	7%
g 時	23	1%	21	2%
h 他	64	2%	21	2%
合計	2,568	100%	1,163	100%

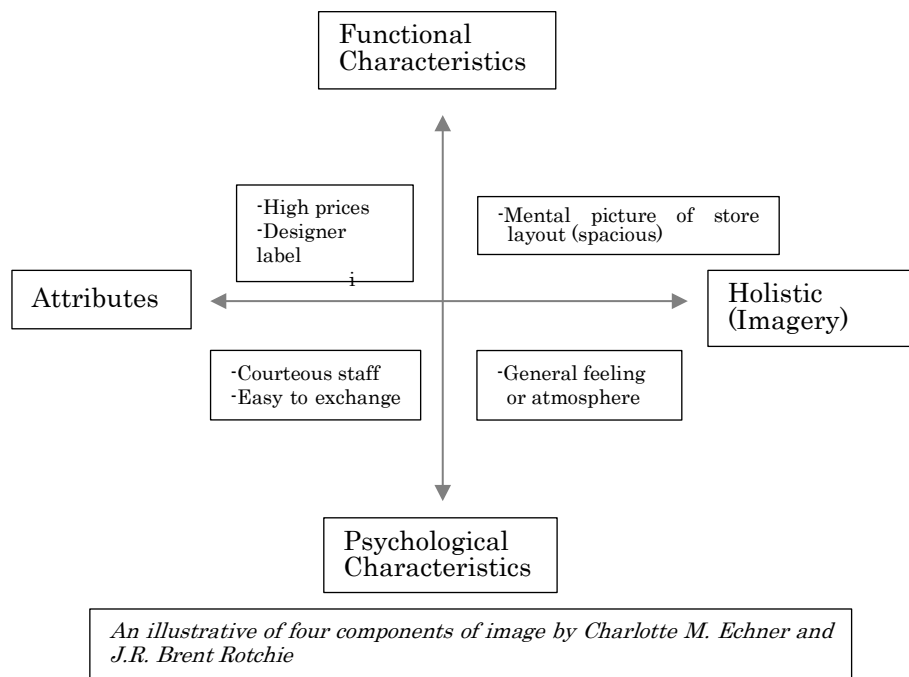


図5.

出典：The Journal of Tourism Studies Vol/14, No.1, May 2003(一部筆者編集)

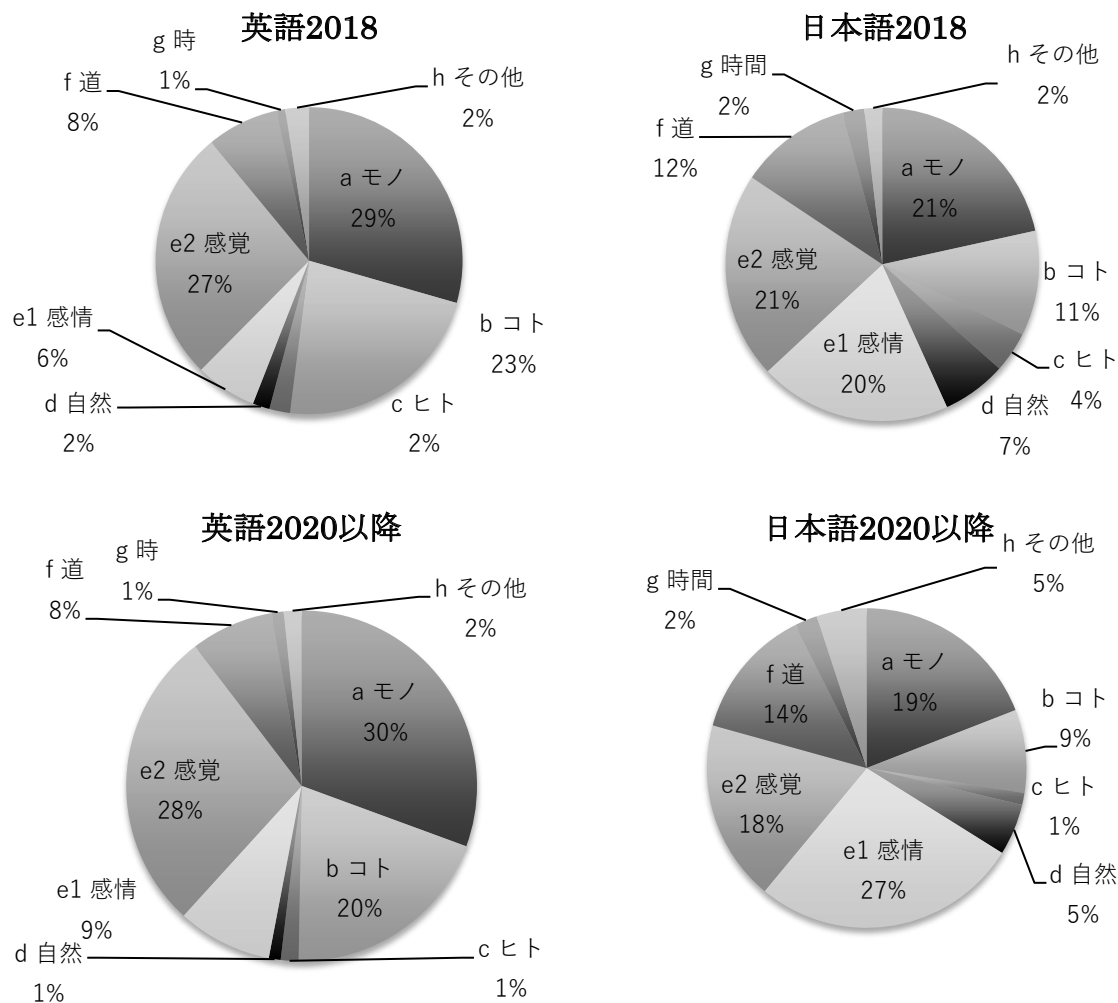


図6. 英語および日本語による分類別割合

表5 頻出言語リスト

	2018	2020	2021-	合計
Tea/Drink	352	123	25	500
Place/spot/location	127	55	8	190
Sweets/Snack/Treat/Fruit	62	36	10	108
Home/House/Cottage/Dwelling	74	25	5	104
Stop/Station	48	36	2	86
Fire	14	12	1	27
Spot	15	4	2	21
Plum (wine)	6	5	1	12
location	7	1	1	9
	705	297	55	1,057

	2018	2020	2021-	合計
お茶	132	75	35	242
漬物/梅酒	6	24	13	43
茶屋/小屋/建物	15	7	5	27
場所	8	12	6	26
休憩(処)	9	4	16	29
スイーツ	0	10	6	16
囲炉裏	3	5	7	15
香り	1	2	1	4
	174	139	89	402

	2018	2020	2021-	合計
Hospitality	161	68	10	239
Love (ly)	135	0	10	145
Rest	76	19	4	99
Experience	29	17	2	48

	2018	2020	2021-	合計
おもてなし	26	13	3	42
話	14	6	5	25
木曾節/唄	14	0	0	14
思い出	5	3	4	12

break	36	5	2	43
Singing/song	39	0	0	39
Conversation/chat/talk	9	6	0	15
Memory	5	5	1	11
Meet	6	4	0	10
	496	124	29	649

Host/Owner/Keeper/Guy	28	12	2	42
People	21	3	0	24
Volunteer	3	1	0	4
Guest	0	1	1	2
Companion	1	0	0	1
Face	1	0	0	1
Family	0	1	0	1
Human	1	0	0	1
Inhabitant	1	0	0	1
	56	18	3	77

Atmosphere	14	0	1	15
Forest	8	2	0	10
Scenery	3	2	0	5
View	2	2	1	5
Nature	4	0	0	4
Smoky	1	2	0	3
Weather	3	0	0	3
Greenery	0	2	0	2
Landscape	2	0	0	2
Mountains	1	1	0	2
Surround	1	1	0	2
	39	12	2	53

great	36	16	2	54
enjoy (ing)	36	11	6	53
surprise	31	9	2	42
amazing	18	8	3	29
appreciate	8	8	3	19
awesome	8	1	0	9
pleasant	7	2	0	9
happy	6	2	0	8
thankful	7	0	0	7
delightful	3	1	0	4
come back	44	6	0	50
	204	64	16	284

beautiful	124	50	8	182
wonderful	104	24	6	134

親切	5	3	0	8
癒し	1	7	7	15
立ち寄る	2	3	0	5
過ごす	1	4	1	6
出会い	3	1	3	7
休む	2	2	0	4
	73	42	23	138

外国人	11	1	0	12
小屋の主人	7	5	2	14
日本(人)	10	2	0	12
島崎藤村	3	0	0	3
人	3	0	0	3
ボランティア	0	1	0	1
	34	9	2	45

桜/花桃	8	10	5	23
自然	13	3	5	21
風景/景色	15	1	2	18
景色	7	2	1	10
雰囲気	2	5	1	8
空気	3	2	6	11
冷たい水	0	5	1	6
空間	0	4	0	4
花	1	2	5	8
水音	2	1	1	4
もみじ	1	2	2	5
	52	37	29	118

また来たい	23	22	16	61
楽しい	22	20	12	54
気持ち良い/気分良い	13	10	7	30
ご馳走様	4	17	7	28
ゆっくり/リラックス/ ホッとする	7	9	8	24
最高	10	5	12	27
一息	12	1	4	17
感動	7	3	4	14
幸せ	3	3	1	7
懐かしい	3	2	4	9
	104	92	75	271

美味しい	47	45	12	104
素敵	20	22	13	55

妻籠宿通過旅行者の心象とCOVID-19によるマインド変化についてパイオニアの願いは継承されているか
—メッセージノートのキーワード(テキスト)から—

welcome (ing)	96	23	4	123
warm	59	45	12	116
kind (ness)	36	27	3	66
nice	45	18	3	66
delicious	24	8	1	33
generous	14	10	2	26
friendly	18	5	1	24
peaceful	12	10	2	24
refreshing	18	5	0	23
perfect	15	6	0	21
	565	231	42	838

暖かい	11	15	8	34
綺麗	14	6	9	29
良い	10	9	10	29
疲れた	9	4	2	15
優しい	6	3	1	10
美しい	8	0	3	11
穏やか	3	4	0	7
満喫	4	2	0	6
	132	110	58	300

walk/walker	76	21	5	102
trail/track/road/way/ highway/path/route	60	28	3	91
Nakasendo	30	9	3	42
hike (ing)	19	10	3	32
uphill	4	0	0	4
footsteps	2	0	0	2
trip	2	0	0	2
	193	68	14	275

歩く/ウォーキング/散歩	33	46	38	117
中山道/街道/コース	28	27	25	80
旅/旅人/山旅	6	11	3	20
道中/山の中/山道	14	3	3	20
ひとり旅	5	5	4	14
ハイキング/トレッキング	4	5	9	18
峠	5	4	2	11
歩きやすい	1	2	2	5
坂道	2	0	2	4
	98	103	88	289

old/past/ancient	8	4	0	12
time	1	8	0	9
traditional	5	2	1	8
History	1	2	0	3
Live Long	0	2	1	3
moment	3	0	0	3
samurai	1	1	0	2
	19	19	2	40

時間	4	9	0	13
昔/往事	9	3	5	17
江戸時代	3	1	1	5
古き	1	2	0	3
歴史	1	1	1	3
伝統	0	1	0	1
	18	17	7	42

Japan	48	14	2	64
countryside	7	0	0	7
Kiso valley	4	1	1	6
authentic (ity)	2	1	0	3
culture	2	0	0	2
Zen	0	2	0	2
	63	18	3	84

コロナ	0	13	9	22
人が少ない/出会わない	0	9	4	13
無料	1	3	1	5
初めて	1	0	6	7
風土	1	0	0	1
平和	0	1	0	1
文化	1	0	0	1
保存	1	0	3	4
修学旅行	1	0	0	1
英語	1	0	0	1
和	1	0	0	1
	8	26	23	57

合計	2340	851	166	3357
----	------	-----	-----	------

合計	693	575	371	1,662
----	-----	-----	-----	-------

(注：網掛け部分はコロナ感染症の影響に関連すると思われるもの。)

ウンド旅行解禁後については今後の研究課題とした
い。

以下は、英語の表現による用語リストと日本語の
表現による用語のリストである。それぞれの用語を
分類して数と利用割合を計算し、最終的に相互の比
較である。

VI. 考察：妻籠宿のイメージブラ ンディングについて

旅行者の訪問先に対するイメージと動機付けにつ
いては論文や著作が公表されているが、市川の研究
による分類の提案は大変わかりやすい。そもそもの
議論について、かつてダニエル・ブーアスティン²⁵⁾
が以下のように述べていることは記憶しておいてよい。

- ・旅行者はいろいろな土地に住んでいる人々に
出会うために世界を周遊した。しかし今日の
旅行代理店の機能の一つは、このような出会
いをさまたげることである。彼らは、旅行し
ている土地から観光客を隔離するために、絶
えず新しい能率的な方法を考案している。(103
頁)
- ・観光客は戯画化されたものを捜し求めるし、
旅行代理店も外国の観光案内機関もすぐにそ
れを与えてくれる。観光客が正真正銘の外国
文化(しばしば理解しがたい)を愛好するこ
とは稀である。観光客は、自分の偏狭な期待を
満足させたがる。…外国も擬似イベントの確認
をしてくれる。われわれの興味の大部分は、
われわれの印象が新聞・映画・テレビに出て
くるイメージに似ているかどうかを知りたい
という好奇心から生まれる。・・・われわれは
現実によってイメージを確かめるのではなく、
イメージによって現実を確かめるために旅行
する。
- ・われわれは、危険や冒険さえも作り出さなけ
ればならない。・・・今日、旅行に伴う危険を
作り出すためには、昔それを避けるために必
要とされた以上に費用がかかり、大きな獨創性・
創造力・計画力が必要である。・・・まだいく
らか存在している冒険的旅行家にとっても、
またそれよりはるかに数の多い観光客になっ
てしまった旅行家にとっても、旅行すること

は擬似イベントとなってしまった。・・・われ
われは見るためではなく、写真を撮るため
に旅行する。(下線筆者)

旅行者は様々なメディアの刺激を受けて訪問先の
イメージを形成し、そのイメージを求める、ある
いはそのイメージを確認するために訪れるという指摘
は、今回の旅行者のメッセージからも強く印象付け
られる。

その一方で、イメージを持たずに訪れた人々の感
動や驚きなど、心の動きを占める言葉は大変興味深い。

動機が何であれ、予期しない自然や人との出会
い、あるいは意外なもてなしなどは旅先のイメージ
に大きな影響を及ぼすことが確認できる。今後とも
このイメージを旅人と行政を含む住民あるいは昨今
のIT環境を活用して様々に分析、関与する事業者
とどのように共有していくかが地域の発展に不可欠
のことになるだろう。

また、過疎地域の活性化および今後のまちづくりに
関しては、外資つまり訪問者のもたらす経済効果
並びに移住者の誘致、新たな産業の振興などが不可
欠であり、その背景となる地域のイメージがポイント
になる。その意味で大都市における少子高齢化問
題への取り組み方と現実的に大きな開きがあると考
えてよいのではないか、今後の研究を待ちたい。

以下に、今後の議論の参考のために、南木曾町の
まちづくりにおける必須の条件としての要素を提起
しておきたい。

- ①「外資」の考え方と地域の価値観との調整
 - (ア)地域の産業構造規模と経済波及効果
 - (イ)域外への依存度の高さ
 - (ウ)モノカルチャー(観光と林業)の脆弱性
 - (エ)新たな流入システムへの期待
- ②地域の価値観
 - (ア)理想(初心：先人たちの知恵)と現実(欲)と
のバランス
 - (イ)価値を生み出しているものは何かについて
の再考(妻籠宿、国有林、電源としての木
曾川)
 - (ウ)地域の持続可能性について(生活圏および
子育て世代の願い－雇用機会と支援体制)
- ③人口減少と世代交代
 - (ア)継承するものは何か(思考法・民意調整法、
歴史文化：中山道、宿場文化、地場産業、

体験活動)

(イ)変わらない流れ(「移住人口－人口流出＝マ
イナス」)

(ウ)リニア時代に向けて

Ⅶ. 分析と結論

小林が妻籠宿の保存維持に向けて願った住民の人情と宿場周辺や街道の雰囲気は、四半世紀以上を経た現在、コロナの影響で旅人の数は減ったものの当初の願い通り、維持され継承されている姿が旅人の言葉から確認できる。インバウンド旅行者の訪問地に対するイメージを確認することにおいても期待通り、あるいはそれ以上の結果をもたらしていることが理解できる。また、日本人の反応も同様に評価することができよう。

コロナという予想外の障壁は、旅行者や受け入れ先に試練をもたらしたが、同時に地域資源の価値を再確認するという機会をもたらしている。徒歩で街道を巡るという行為が、ただ単に観光するというだけでなく、自然と向き合い、地域の人と出会い、もてなしを受けて感謝するという一連の心の動きが、健康な体や環境を願うということにつながっていることを示す結果でもある。その意味で、市川が分類した旅行者の4つの訪問希望カテゴリに対して、「心を満たす型」あるいは「健康志向型」という目的を加えることも可能である。

また、日本語のコメント(ほとんどは日本人)と英語(全て外国人)のコメントの総括について、日本語利用旅行者と英語利用旅行者(＝外国人)の分析から見る特徴として以下のようにまとめておきたい。なお、これらの特徴は、あくまでも今回のコメントのみから読み取れたものであり、普遍的な特徴の判断を示すものではないことを指摘しておきたい。

- ①感情的表現において英語圏(＝外国人)より日本語圏(日本人あるいは日本文化理解者)の方が比率において高い。
- ②英語圏の感覚に関する表現が多い。
- ③英語圏の旅行者は具体的なモノ(茶や小屋、提供されたもの、壺あるいは囲炉裏など)への関心が高い。
- ④歩く道に関しては、全体的に反応は低いが、日本人の反応の割合が高い。

⑤英語圏の人々に見えるものより道中の様々な体験に興味を持つ。

⑥日本語圏の人々の方が周囲の自然に対する関心が高い。

⑦コロナ感染症の影響については、街道を通過する旅行者の大幅な減少とそれに伴う出会いの機会の減少が道中の静けさや自然の再認識につながると同時に寂しさを感じるという旅行者が現れている。その結果小屋の存在が強く意識されている。

さらに、各カテゴリー別特徴と思われる点については以下の通りである。

【モノ】

言語圏に関係なく、お茶とスイーツなどの提供品、そして、茶屋の存在そのものへの関心が非常に高い。茶屋の存在に対して、旅の途中の休み所としての価値の高さを表している。こうした関心は外国人旅行者によるものが特に強く示された。

【コト】

小屋の主人あるいは運営者のもてなしに旅行者の誰もが感謝を示している。旅の途上における人情と接遇に大きな価値を見ることができる。また、主人の木曾節のもてなしは言語圏にかかわらず好評で、人との出会いやそこで発生する会話が旅行者の心を癒す効果を持っているようだ。また、途中での体験や気づきなどへの関心については外国人旅行者の方がその割合が高い。

【ひと】

小屋の運営者に対する関心が中心で、途中で出会う人々との交流も記憶に残るようである。中山道の主役となる島崎藤村をはじめとする文化人や歴史的登場者に日本人旅行者が中心になるのは情報量や日本文化理解の深度を前提とするためやむおえないところだろう。

【自然】

街道ないしは小屋周辺の自然に関しては両者ともそれほど高くない。通過する季節により、桜や紅葉といった表現が出てくる。景色や雰囲気についての反応は言語圏に関係なく表現されている。

【感情】

感情面での表現は、インパクトの大きさや新しいことに直面する楽しさ、そしてその上でまた来たいという再訪希望の高さがよく現れている。

【感覚】

美しさへの視覚や、もてなしや親切さへの感覚が多様に表現されており、特に英語圏からのコメントの多さは指摘しておいてよい。

【道】

街道を歩くことへの評価は、歩くことそのものへの評価と旧中山道へのある程度の認識の高さが示された。これは事前の情報収集や外部動機が存在を示唆するもので市川の分類を裏付ける。

【時間】

歴史や時間に想いを馳せるといったコメントはそれほど多くはなかった。日本の街道を歩くことの意味付けを歴史や時間と結びつけるためにはまだ情報量や手法が検討されるべきだろう。

【その他】

外国人旅行者による日本への意識は、街道ウォークにおいてしばしば呼び起こされるようであり、内容も好意的である。日本の良さや風景などへの安定的な評価はこの道筋でも強く感じられる。一方、日本人旅行者については、2022年に入ってからコロナ感染症の影響を強く受け、その影響から街道歩きを考えている様子が窺えた。この反応は外国人旅行からは窺い知ることはできなかった。

Ⅷ. まとめ

本稿の目的は、妻籠宿場の保全と地域の再生にとって、その運動を組織化し軌道に乗せた小林俊彦の思惑が、その後も地域において生かされているかどうかを、旧中山道を通る旅人が残したメッセージから感じ取ることにあった。そしてコロナ感染症という未曾有の障壁の登場によっても、その意図が引き続き存続しうるのかどうかを探ることを目的としたものである。

検証研究の中から総括できることは、日本語圏あるいは英語圏の旅行者にかかわらず、この街道のイメージが、道すがら位置する伝統的な建物(一石榎立場茶屋)における予想外の休憩処とそこでの人々との出会いそして人情との接触、あるいは、もてなしといった極めて人間臭い要素が大きく効果を示しており、小林の期待した歴史的名残の風景の価値と素朴な人情への率直な反応が示されたのではないかと。

また、特に日本語圏の旅行者にとっては街道の雰囲気と周辺の自然環境をこれらの要素に加えること

ができるのではなかろうか。妻籠宿の持つ固有のイメージそして旧中山道という高いブランド力の要素について、今回実際に通過する旅人の体験や目からはこうした具体的な細かい要素を窺い知ることができたが、いずれも地域保全とそのため的手法として考えた先人の優れた見識に驚くほかはない。全国の重要伝統的建造物群を抱える地域では、様々な保存や活用が導入されているようだが、妻籠宿およびその周辺の地域資源への考え方のように実際に通過する旅行者の目線で見直すあるいは再評価することも必要なのではないかと。

また、コロナ感染症との関連については、その影響は訪問者数の大幅な減少として現れた一方、旅行者にとっては旅行者の少なさを心配する面での影響が出ており、この地域における感染そのものへの不安は見られなかった。とりわけ外国人の間にはこれに関するコメントはなかった。

最後に、本稿とも関連する観光研究に関して一言付記しておく、その目的は本来観光そのものの普遍的課題である『観光は平和へのパスポート』という永遠のテーマであることを常に忘れてはならないことである。その平和は、旅人と受け入れる地域社会との健全なバランスがあって初めて達成される。つまり、観光をする側の論理と観光を振興する側の論理とがうまく噛み合っただけで初めてその効果を評価することができる。それゆえ旅行者と旅行者を受け入れる側の心の触れ合いが地域と地域素材との価値を高め、お互いの存在意義を理解することにつながっている。

本稿における地域研究の意義は、コロナ感染症のような大きな障壁がある中においても、地域資源の保全や地域振興のために資源を有する側とそれを活用する人々との相互理解の重要性を確認するところにある。特に地域を担う住民にとっては、ここに生まれてあるいはここに住んでよかったと思う、いわば誇りを再確認できる点である。この地域づくりに人生を賭けた小林俊彦という人物の先見が今後とも持続することを願いたい。

謝辞

本論を展開するにあたっては、資料やデータ、あるいはアンケートへのご協力など「妻籠を愛する会」の藤原義則理事長をはじめ南木曾町役場や地域の

方々より多大なご協力やご支援をいただいた。この場をお借りして深く感謝したい。

注

- 注1 小林の経歴や人となりは各著作の巻末に詳細な記述があるので参照。
- 注2 妻籠および南木曾町にゆかりのある人物として、福澤桃介、川上貞奴、島崎こま子などがおりそれぞれにちなんだ著作が刊行されている。森田昭子、「島崎こま子 おぼえがき」(2006、文芸社) 鈴木静夫「木曾谷の桃介橋」(1994、NTT出版)、レズリー・ダウン「マダム貞奴—世界に舞った芸者(木村英昭訳)」(2007、集英社)
- 注3 2020年までのコロナ感染症の蔓延についての経緯に関して岡部(2020は日本内科学会雑誌109巻11号、pp.2264-2269)に詳細に記載している。
- 注4 文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律(「文化観光推進法」(略))に基づいて認定を受けた拠点計画や地域計画に基づき実施される事業に対し、文化資源の磨き上げ、Wi-Fiやキャッシュレス等の整備、学芸員等の体制支援、バリアフリー等の利便性向上改修や展示改修等、地域一体となった観光コンテンツの造成等の取組を支援することによって、文化の振興を起点とした文化観光を推進し、文化・観光の振興、地域の活性化の好循環を図ることを目的とする(文化庁資料より)。ただし、令和4年現在「妻籠宿」地域は指定地域に含まれていない。
- 注5 Department for Transport, England 2020²⁶⁾、および Ministry of Foreign Affairs, Netherland 2021²⁷⁾
- 注6 モノは静的であり、コトは動的であることを意味するが、心理学的に見れば、『もの』とは経験へのプロセスにおける対象となるものであり、『こと』とは探究あるいは表現するための行動である、という捉え方もある。(上野正道2022「ジョン・デューイ」岩波新書、p.107)

文献

- 1) 小林俊彦, 「妻籠宿の保存と開発」『ジュリスト増刊総合特集』No.4, p.325(1976).
- 2) 小林俊彦, 「妻籠宿小林俊彦の世界」『普請研究』第21号, 普請研究会(1987).
- 3) 小林俊彦, 「伝統的な町並み環境保全と私—妻籠は残ったしかし」『土木学会誌』4月号, pp.41-46(1984).
- 4) 小林俊彦, 「町並み保存の現状と課題—妻籠宿を通して保護法を探る」『ジュリスト』No.710, pp.77-80(1980).
- 5) 太田博太郎, 小寺武久, 『妻籠宿その保存と再生』彰国社(1985).
- 6) 太田博太郎, 『歴史的風土の保存』彰国社, pp.129-165(1984).
- 7) 北原礼文 et al., 「妻籠宿における地形から見た水路網・土地利用と住民の保全意識」『日本造園学会』72号(5)(2009).
- 8) 石山千代 et al., 「集落・町並み保全地域におけ

- る地域主体の調整システムの構築と調整課題の変遷に関する研究』『日本都市計画学会論文集』Vol.53No.3(2018).
- 9) 同, 「集落・町並み保存地区における自主規範の法制化の過程に関する研究』『日本建築学会計画系論文集』740号, pp.2637-2647(2017).
- 10) 森朋子, 「伝統的建造物群保存地区制度成立に至る議論から見た集落の保存概念』『日本建築学会計画系論文集』702号, pp.1839-1844(2014).
- 11) Peter Siegenthaler, Creation Myths for Preservation of Tsumago Post-Town, Planning Forum 9, Journal of Community and Regional Planning School of Architecture, University of Texas, (2003)
- 12) Junko Goto, et al., The Conservation of Historic and Cultural Resources in Rural Japan, Landscape Journal Vol.6 No.1,(1987)
- 13) 澤村明, 「街並み保存の経済分析手法とその適用—木曾妻籠宿の40年を事例に—』『新潟大学経済論集』第88号, pp.19-32(2009).
- 14) 市川康夫, 「中山道を歩くインバウンド・ツーリズム—欧米系観光客の来訪動機に着目して—』地学雑誌128(6), pp.921-940(2019).
- 15) Thomas Yates et al., Obesity Walking pace and risk of severe COVID-19 and mortality: analysis of UK Biobank, International Journal of Obesity 45: pp.1155-1159,(2021).
- 16) Ruth F. Hunter et al., Effect of COVID-19 response policies on walking behavior in US cities, Nature Communications, Article,(2021).
- 17) Fernanda B. Andrade et al., The Weight of Obesity in Immunity from Influenza to COVID-19, Frontier in Cellular and Infection Microbiology, volume11, pp.1-14,(2021).
- 18) Lea Pietri et al., Excess body weight is an independent risk factor for severe forms of COVID-19, Metabolism Clinical and Experimental 117, pp.1-7, (2021).
- 19) V. Bunk, M.Skalska, Walking as a prevention of overweight and Obesity in Women of Middle Age, MOJ Women's Health, 3 (2) : pp.189-193,(2016).
- 20) Cacek Jan et al.(2014), Walking and Obesity in the Adult Population of the Check Republic, Procedia Social and Behavioral Science 117, pp633-638
- 21) 大久保立樹 et al., 「旅行ガイドブックと口コミの言語解析による訪日外国人の観光地イメージに関する研究』『公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集』Vol.49 No.3, pp.573-578(2014).
- 22) 菊池重三郎, 『木曾妻籠』東京新聞出版局, p.49(1972).
- 23) Charlotte M. Echtner et al., The Meaning and Measurement of Destination Image, The Journal of Tourism Studies Vo.:14, No.1 pp.39-43, (2003).
- 24) 木村敏, 『時間と自己』中公新書, pp.4-31(1982).
- 25) D.ブーアスティン, 「旅行者から観光客へ』『幻想の時代』(後藤和彦訳)東京創元社, pp.89-128(1975).
- 26) Statistical Release 2020, Walking and Cycling Statistics, England: 2019, Department for Transport, England
<https://www.gov.uk/government/statistics/walking-and-cycling-statistics-england-2020> (閲覧日2023.2.10)
- 27) European Walking Tourism Market (2021), CBI, Ministry of Foreign Affairs, Netherland
<https://www.cbi.eu/market-information/tourism/walking-tourism/market-potential> (閲覧日2023.2.10)

その他参考文献

- 西部絵里 et al., 「ウォーキングにおいて重要視される風景とその役割に関する研究—徳島県吉野川市を対象として—』『日本都市計画学会都市計画論文集』44-3, pp.43-48(2009).
- 道尾淳子, 「中山道宿場町67宿における旧街道の道路特性に関する研究』『芸術工学会誌』No.58, pp.43-50(2012).
- Yucheng Wang et al., Association of City-level Walkability, Accessibility to biking and public transportation and socio-economic features with COVID-19 infection in Massachusetts, USA: An ecological study, Geospatial Health; 17(sl), (2022).
- Kun Yuan et al., Impact of the COVID-19 Pandemic on Walkability in the Main Urban Area of Xi'an, Urban Science 6, p.44,(2022).
- Yunfan Wu et al., Influence of COVID-19 Crisis on Motivation and Hiking Intention of Gen Z in China: Perceived Risk and Coping Appraisal as Moderators, International Journal of Environmental Research and Public Health 19, p.4612, (2022).
- Shuichi Obuchi et al., Change in outdoor walking behavior during the coronavirus disease pandemic in Japan: A longitudinal study, Gait & Posture, 88, pp.42-46, (2021).
- Min GAO et al., Associations between body-mass index and COVID-19 severity in 6-9million in England: a prospective, community-based, cohort study, Lancet Diabetes Endocrinology vol.9, 2021, pp.350-35, (2021).
- Soon Jo et al., Satisfaction with the walking-related environment during COVID-19 in South Korea, PLOS ONE, South Korea, pp.1-11, (2021).
- Fernando T. Lima et al., Understanding the impact of Walkability, Population Density, and Population Size on COVID-19 Spread: A pilot Study of the Early Contagion in the United States, Entropy, 23, p.1512, (2021).
- William Scott Wilson, Walking the Kiso Road,

A Modern-Day Exploration of Old Japan,
Shambhala, (2015).

Kucian Swift Kirkland, Samurai Trails:
Wanderings on the Japanese Road, (2017).

『妻籠の歴史』南木曾町博物館(2018).

『南木曾町誌通史編』南木曾町誌編さん委員会
(1979).

辻のぞみ, 「日本のインバウンド観光政策の変
遷についての一考察」『名古屋短期大学研究紀
要』第56号, pp.135-150(2018).

松永康司 et al., 「訪日旅行のブランド・イメー
ジに関する調査研究」『国土政策研究』第126号,
国土交通省国土交通政策研究所(2015).

岡野雄気 et al., 「観光地への愛着に影響を与え
る滞在中の経験」日本観光研究学会, 『観光研
究』Vol30, No.1, pp.5-18(2018).